

命名機序と心理臨床

井芹 聖文

I.はじめに

小さな子どもは、見聞きするものすべてを真新しく感じ、未知のものや馴染みのない現象に遭遇するたび、「これは何？」と飽きることなく質問する。そして種・類を含めて、「これは犬だよ」「柴犬だよ」などとそのものの名前を教えられることによって、みずから生きる世界に関する知識を増やし、さらなるものとの関わりを拓げ、深めていく。

こうした所与の世界に対する名前を通じた関わり方は子どもに限られたものではない。私たちの日常生活はもちろん、心理療法の面接場面においても見られる。クライアントがセラピストに対して自分の抱える心の痛みは何なのか教えてほしいとあたかもアドバイスを仰ぐかのように尋ねたり、お気に入りのおもちゃに名前をつけて自分にとって特別なものにしたたり、また、自由画など描画や造形物に対して名前をつけることによって、そこに内包される意味やイメージを探求したりすることもある。

名前を知るということは、言い換えれば名前を与えるという命名行為を表している。そこで本稿では、まず命名行為が一般に「主体が対象に名前を与える」という構造を持つものであることを指摘し、それを構成する要素とその関係、および性質を、命名機序として捉えることを試みる。そして、以下の3点について検討することが本稿の要旨であり、目的である。1. 基本的な命名機序とその作用を整理する、2. 心理療法において見られる命名や名前の特徴を概観する、3. そこから、心理臨床における命名機序を捉える視座、すなわち命名行為に関する心理臨床学的研究の方法論がいかにして可能になるかを考察する。

なお、本稿で用いる主体や対象などの用語は、特に命名機序での両者の関係を強調する場合において、出口(2005)が用いる「名づけるもの (Name-Giver=NG)」と「名づけられるもの (Name-Taker=NT)」との関係に近い意味合いを帯びるものとする。

II.命名機序という視点

(1) 原始治療における名づけ

Ellenberger の名著『無意識の発見』(1970/1980) では、はじめに「力動精神療法の遠祖」と題して、「現代精神療法が用いる技法で、形式こそ違っても、未開人や古代

人がすでに使っていたものが決して少くない」ことが指摘され、未開民族の呪医やシャーマンの行う治療報告が挙げられていく。そこでは疾病説とその治療が、「疾病物体の体内侵入説」や「靈魂亡失説」など五つの主要形態に分類されており、中でも、ペルーのケチュア族のインディオにおけるクリオーソという治療者の仕事は興味を誘う。スストと呼ばれる靈魂を失った状態と見なされる病気に対して、クリオーソは患者とともに魂を迎え入れる種々の準備をしたのち、次のような行動をとるとされる。

行方不明の魂の名を厳かに呼ぶ。この呼びかけを五回繰り返す。五回目の呼びかけが終わる瞬間クリオーソは必ずある特別なざわめきを聴き取るとされている。このざわめきこそ行方不明の魂がそこに来ているしるしである。

(Ellenberger, H.F., 1970/1980, 7頁)

ここでの治療に深く関わっているのが、名前の存在である。名前が儀礼的かつ治療的な側面を持つことは、中央アフリカ社会における病氣なおしの儀礼においても文化人類学者のターナー (Victor Turner) によって確認されている。「病気で苦しんでいる患者の苦痛を、何らかの象徴的形式で捉えることができれば、それによって宗教的職能者を通して社会的に対処し得るものになる」(市村, 1996) という意識のもと、呪医は名前を与えることによって病氣を対処可能なものにしようとしたのである。さらに、市村 (1996) は「日本古代の王権においても『不吉な状態に名をつける』ことが行われた」として、疫病の蔓延に対して『大物主』の仕業として名指しした」と指摘している。

これらに共通しているのは、「人間がわけの分からないものを前にしたとき、それに対して何々という言葉を与えることによって対処可能なものにする」という一つのモデルである。このモデルが成立していた背景には、神田橋 (1984) が論じるように、「彼(筆者注：医療を仕事として担っていた当時の呪術者)は、経験と推理と空想とに基づいて、さまざまな不幸の、原因と現症と経過と処置について定め、いくつかの群を想定し、それぞれの群に名称を与えた [...] そのようにして生まれてきた診断類型は、当然、病因論、疾候論、経過の見通し、処置法がセットになったものであった」という認識が想定される。

もちろん、今日の自然科学的なモデルはシャーマニズムや陰陽道の治療とは全く異なっている。しかし、Ellenberger がそこから有益な示唆を得ようとしたように、原始治療は単なる荒唐無稽な迷信として切り捨てられるものではなく、現代の心理療法のあり方と共通している点が多く見られることは興味深い(河合, 2000)。命名に関して言えば、「見えないもの、それゆえに神秘化されるとともに恐怖や不安をよびおこすものを、『見える』ものとすることによって恐怖心を鎮静し消去する」(竹中, 2010) という治療的作用が認められるのである。実際、古典的な意味での精神分析が、元来無意識の抑圧された意味である「わけ」を言語化し、少しでも「わかる」状態にすることを基本的な方針としていたこと(妙木, 2005) は、このモデルに通じる内容だろう。

(2) 命名機序という視点

診断名という病につけられる名前に限らず、名前は一般に「その人（物、事象）が、如何ようにこの世界に顕れ存在するのかという、存在の本質を示すもの」（山，2003）であるという認識を、私たちは少なからず持っている。これまで名前および命名の問題は、哲学や言語学の観点からは、しばしば名前の本性論（自然性か恣意性か）や固有名、指示の問題との関連で論じられ、また文化人類学においては、人名やそれにまつわる社会的なタブーに関する実証的な研究がなされてきた（大月，2007）。筆者はそのような観点ではなく、心理臨床学的観点から命名をめぐる事態に興味を魅かれる。先に記したモデル、すなわち繰り返せば「主体がわけの分からないもの（対象）に対して、何々という言葉（名前）を与える」という命名構造を考えると、心理療法においてこの構造の対象の位置には、症状や病氣に加えて、箱庭や描画、さらには夢など可視・不可視の事物が据えられよう。そして、症状や病氣を抱える、玩具や砂と関わったり絵を描いたりする、夢を見る（夢の中で種々の体験をする）というように、これらの対象は他の何とも還元できない〈私〉と深く結びついたものであり、名前の付与という行為を通じて対象を知ろうとすることは、とりもなおさず〈私〉が〈私〉自身を知ろうとすることにつながってくると考えられる。

ところで、名前は本当に対象の「存在の本質を示すもの」なのだろうか。ル＝グウィン（Ursula K. Le Guin）が書いた『ゲド戦記』（Earthsea）は、万物に「真の名」と通り名とがあつて、「真の名」を知れば対象を操ることが出来るとされた世界の物語である。彼女の父親が著名な文化人類学者であること（清水，1999）を思えば、彼女がこの誇大呪術的な言霊的思考を魔法の中心に据えたのにはそうした環境で育った影響が考えられよう。そして、心理療法においても名前が自然的実体であるかのような言霊的思考、魔術的治療は見られるが、けれども実際には、それが「真の名」であるかどうか、例えばクライアントを悩ませる核心であるかなど一概に判断することは困難である。また他方では、商品名や最新の流行に聞き慣れない奇妙な名前がつけられるという現象にも見られるように、この世のありとあらゆるものに新しい名前が次々につけられては忘れられていく今日において、名前は世界との応答関係を背負って私たちに働き訴えかけてくるものではなくなくなってきているのかもしれない。

ここで、河合（1991）が例として、自身の感情のイライラを考えているとき、それが自分の父親の口癖と関連しており、強い反発を感じていたのを思い出すことを契機にしてイライラが収まっていくことがあると挙げているのは注目に値する。確かにイライラという対象の本質（「真の名」）が父親の口癖に対する反発心だったかは判断できないものの、「『真の名』かどうかわからないのだが、真の名に近い辺りを知っても、相当に効果がある」（河合，1991）ということは示唆深い。心理学的に重要なのは、つけられる名前が対象の本質を捉える「真の名」であるかという是非ではなく、名前を通じて主体が対象を把握しようとする行為そのものの中に存在するのではないだろうか。ここに、名前ではなく命名行為を問う意義が見出される。

命名行為に関して、「主体が対象に名前を与える」という基本的な構造とともに、そ

こでの要素やその関係、および性質を、本稿では命名機序と総称する。これにより、対象につけられた名前が何であるかはもとより、名前をつけようとしたが結局はつけられなかったという事態についても考察が可能となると思われる。また、命名と名前は表裏一体の関係であってどちらか一方のみを論じることは出来ないため、この視座の導入は、本稿が、即座に名前の意味論を問うものでもなければ、むやみやたらな名づけを奨励するものでもないことを強調する。後述するように、安易な名づけは心理療法においてもむしろ病理を生み出しかねない。

次節では、命名機序の基本的な性質について整理するが、とりわけここで見られる命名構造は、のちに心理臨床学的な観点から再考を測られるものである。

III. 命名の基本的機序

創世記では、天地創造の一日目において、神が光を昼と、闇を夜と名づけることによって世界の形態は変えられていく（関根，1967）ように、名づけの能力が余すところなく駆使されている。また、記紀に見られる日本神話においても、その冒頭では天と地が分離した中から最初の神が生まれ、しばらく神々の名前の羅列が続く（坂本ら，1994）。こうした神話的世界に象徴されるように、命名には「それまで存在しなかった対象を生み出す根源的作用」（丸山，1983）があり、人間は「名前によって、連続体としてある世界に切れ目を入れ対象を区切り、相互に分離することを通じて事物を生成させ、それぞれの名前を組織化することによって事象を了解する」（市村，1996）¹。この意味において、名前を知るという行為がある存在の認識の獲得につながるものが再び確認される。そして、対象を分け、それぞれが固有の名前を持つことによって世界に新たな秩序が生成されていくのである。しかしながら、「連続体としてある世界」という一にして全であった状態を名づけによって分断することは、対象が本来持つ自然性を破壊する行為にもつながりうる。このように、命名は分断という根源的作用を軸に、そこから生産的で創造的な側面と、破壊的で暴力的な側面を有していると考えられよう。この相反する二つの働きは、名づけの両義性とでも呼べるものである。

また、名前が対象の分割や組織化と深く関係していることを思えば、それは命名行為の行われる時空間とも緊密な結びつきを持っており、それゆえ強力な固有性を備えていることが導かれる。虹の色は、虹を見る地域や民族、時代によって大きく異なることはよく知られているが、ときに主体が対象に対して好意を寄せた名前をつけることでそこに愛着関係が生まれるように、命名を通じて主体と対象は深い結びつきを持つ。その一方で、鈴木（1973）が論じるように、命名とは「混沌とした、連続的で切れ目のない素材の世界に、人間の見地から、人間にとって有意義と思われる仕方、虚構の分節を与え、そして分類する働きを担っている」（傍点筆者）ため、主体と対象との関係においては主体の優位性が生まれやすい点は見逃してはならないだろう。ここには、命名機序に見られる主体と対象との関係の重層性が垣間見える。

さらに、名前の固有性に重点を置けば、それが第三者にとってはしばしばまったく

意味の分からないものになり、記号的な様相を帯び始める。記号的側面が最大限に押し進められるとき、単なる区別や識別のためだけに名前は存在し、もはやそこに意味を見出すことは出来なくなるだろう。裏を返せば、あえて意味を持たせないという意味で匿名性という様相も顔を出してくるのである。

やや多岐に渡ったが、以上を踏まえるならば、命名行為の根幹にあるのは分断作用であることが見出される。この分断作用を中心に、心理療法場面における命名と名前に関する先行研究を次に概観していく。

IV.心理療法における命名と名前に関する先行研究

(1) 対象の分断

心理療法における命名や名前を考える際、はじめに思いつくのが病名や診断名である。もちろん、臨床心理士が行うのは診断ではなく見立てであるが、そこでもクライアントの悩みや苦しみに接近していく上で、それらを考えるのは当然のことだろう。

神田橋（1984）は診断の機能として、「1. 医師が経過を見通し、処置法を決定するための指針、2. 専門家の共通言語、3. 患者に病状を説明するための道具」の三つを挙げている。第一機能は先に論じた原始治療とも通じており、病名や診断名はその病因や現症を考え、対処法を想定しようとするものである。精神分析もまた、衝動やそれに対する不安、防衛という枠組みを通じて、治療者がその状態を理解し言語的に介入する解釈という方法を用いて行われる（妙木，2005）。これらはどちらかと言えば、クライアント本人ではなく、治療者を含めてその人を取り巻く人物が命名の主体となつて、クライアントの心の病という対象を分断し事態の把握に努める行為だと言えよう。

しかしながら、命名はこのとき強い固有性を発揮するがゆえに、そこにいなかったものにとってはその名前が何を意味するものなのか分からなくなる事態も起こりうる。そのために、「専門家の共通言語」でなければならず、さもないとその言葉はむしろ有害なものになる。妙木（2005）は、治療的な名づけることと区別して病理的な名づけることを挙げており、「ラベルとしての診断はあくまで患者の一面を切り取ったものにすぎない」にも関わらず、治療者があるクライアントやある状況を一方的に決めつけることで生じる弊害を指摘する。このことは次の二つの病理を生み出すと思われる。まず、治療者がある概念や見方でクライアントに接していくと、クライアントがそれに合わせてしまう可能性がある。そして、1960年代に社会学的見地から提唱されたラベリング理論（Becker, 1963/2011）に見られるように、社会的な歪曲が生み出した否定的なレッテルによって、さらなる周囲からの疎外や排除を生み出してしまうおそれがあると考えられる。

また、命名が持つ否定的側面がクライアントに与える影響を考慮すると、描画や箱庭などに対して積極的にタイトルをつけることをセラピストは要求しない。命名を、多義的なイメージを一つの言葉に集約する試みとして広い意味でイメージの言語化だと捉えるならば、制作後にさらなる関与を求めることで生じるクライアントの負担の増大を懸念するほか、河合（1969）が論じるように、対象に内包される豊かなイメー

ジを一面的に決めつけてしまうことで、イメージ本来の動きが枯渇され、固定化を招きかねないからである。ただし、風景構成法において作品に表れたイメージの言語化が「豊饒性に終止符を打って、場の呪縛から個人を解放する」ことを中井（1996）が指摘し、東山（1994）は箱庭に物語を作る行為を「自分の生のイメージをことばを通して自我に取り入れる」試みとしてその重要性を説くように、イメージの言語化をめぐっても、名づけの両義性同様に正負両面があると言えよう。

(2) 主体と対象との関わりの分断

今述べた先行研究をもう一度見返すと、そこには対象の分断に加えて、もう一つの分断、すなわち、命名には主体と対象との関わりを分断してしまう可能性が見出せる。具体的に論じるならば、あるクライアント（主体）が箱庭（対象）にタイトル（名前）をつけたとき、その言葉には、クライアントが自分の箱庭をどのように感じたかという主観性が投影されていると考えることが出来る。その意味では、この名前に基づく主体と対象との固有の関係は強調されるだろう。しかし、その強い結びつきがゆえに、その箱庭の持つ意味はすでに理解していると分かった気になってしまったり、主体がまだ捉えきれていない意味やイメージに対する探求が終えられたりするおそれがあり、そこでの関わり合いがなくなってしまういかねない。治療者の行う診断や解釈においても同様の事態が起こりうることは十分に考えられよう。

このように、主体と対象との間に何らかの関係があっても、両者にその後の、あるいはそれ以上の関わり合いが成立しているとは必ずしも言えない。主体と対象との関係の重層性をめぐるこうした現象は、やはり名づけの両義性に共通する内容であるとともに、心理療法における命名機序を考えるにあたってきわめて重要な観点である。

なお、河合（1998）は、主体が「意味づけを探していく限り、なされた意味づけは常に壊されていくことになり、それは新たな意味づけを求めて泥沼的に意味への幻想、支配への幻想に囚われる」ことになり、意味づけを探すという意識が神経症を生み出すと指摘する。自我の優位性に陥らず、対象の持つ意味を尊重しようとすることは確かに大事だが、それが別のところでまた新たな病理を生み出しかねないことも留意すべきである。

(3) 心理療法が行われる空間性

神田橋（1984）の挙げた診断に関する三つの機能を今一度振り返ってみよう。すると、特に第三機能に見られることだが、診断やそれに基づく診断名ないし病名は、クライアントとのコミュニケーションのツールとして存在している。これまで、命名構造を「主体が対象に名前を与える」という意味で考えてきたが、そこでは主体の位置に座するのはただ一人の人物を想定してきた。実際、診断や解釈などは治療者が名づけるものであったり、タイトルは主にはクライアントがつけるものであったりという具合である。けれども、とりわけ深層心理学的なアプローチによる心理療法とは、時間や空間を枠によって区切ることによって生まれる特異構造の中で、二人の人間が出

会い、そこに幾多の言葉が生まれ、そしてその言葉をまた二人で共有しながらそこにあるイメージを深めていく場である。すなわち、命名によって生まれたものをまた二人で見つめ直していくわけであるが、このような観点を想起すれば、今まで論じた一人心理学モデルとしての命名構造ではなく、クライアントとセラピストという二人の関係性を織り込んで命名機序を捉える必要性があらためて認識されてくる。

以上、心理療法における命名や名前について先行研究を概観してきた。そこでは、命名行為が自我の優位性を尊重しやすきことに対する警鐘とともに、心理療法における命名機序を考察するためには面接空間における二人の関係性という視点を導入することが要求された。

ここから心理療法における命名機序の再考が測られるが、その前に、もう一つ問わなければならないことがある。命名構造の内にある「主体が」という主語性が暗に導きやすい自我の優位性を、命名は脱却することが果たして可能なのだろうか。この点について、再度、命名機序における主体と対象との関わりという点から検討したい。

V. 命名機序における主体と対象との関わり

(1) 混沌の寓話

命名機序において対象の座に据えられるのはしばしばよく分からないものであり、混沌という言葉で表現されやすい。そのため、人間と混沌との関わりを振り返ることは、命名機序における主体と対象との関わりの様相を見出す一助となると思われる。次に、古代中国の思想家である荘子の『渾沌、七竅に死す』の寓話を取り上げよう。

南海の帝を儵と為し、北海の帝を忽と為し、中央の帝を渾沌と為す。儵と忽と、時に相与に渾沌の地に遇う。渾沌、之を待つこと甚だ善し。儵と忽と、渾沌の徳に報いんことを謀りて、曰わく「人皆七竅有りて、以て視聴食息す。此れ独り有ること無し。嘗試みに、之を鑿たん。」と。日に一竅を鑿つに、七日にして渾沌死せり。

(荘子、『内篇 応帝王篇 第七』)

人間には七つの竅（あな）があって、美しい色を視て、妙なる音を聴き、美味なる物を食べ、安らかに呼吸する。儵（しゆく）と忽（こつ）は、一つの竅もない渾沌を人間らしくしようと良かれと思って竅をあけていくが、これにより最後には渾沌を殺してしまう。福永（2011）によれば、儵と忽は「人間の束の間の生命」、渾沌は「大いなる無秩序、あらゆる矛盾と対立をさながら一つに包む実在そのもの」を象徴しており、この寓話は「人間のさかしら一作為と分別が、真の実在、すなわち一切存在の生成澁刺たる自然のいとなみを窒息させ死滅させる愚かさを諷刺している」という。全体が一つに溶け合う異質的連続体である対象を人為的作為によって分断するこの事態は、人間の一方的な知的処理であるとも読み取れるだろう。

命名もまた、名づける主体として立つ人間による対象への暴力となるとき、唯名論的なアプローチになると言えよう。ここでの唯名論とは、鈴木（1973）が言語学の立

場から、「唯名論的な考え方が、言語のしくみをただしくとらえているようだ」として「ものという存在がまずあって、それにあたかもレッテルを貼るような具合に、ことばがつけられるのではなく、ことばが逆にものをあらしめている」とする考え方に匹敵する。主体が対象を征服したり、そこでの関わりを失ったりするような作用が命名によって生じれば、対象に対する一方的な知的処理やラベリング理論に見る疎外のよように、さらなる病理を生んでしまうことになる。

(2) 唯名論と実念論

ところで、心理療法でしばしば話題にされる事柄として、自我の働きに重きを置か無意識の内容を深めるか、どちらが治療に作用しているのかという問いが二律背反的に論じられることがある。心理療法における命名機序を思えば、治療に効果的な命名とは主体と対象のどちらが優先され強調されるべきかという問いもまた当然起こってくるだろう。そしてこの問いは、哲学における普遍論争、すなわち唯名論（言葉がものをあらしめると考える立場）と実念論（ものという存在がまずあってそこに言葉がつけられると考える立場）のどちらが正しいのかという問いともまた深い関係を持つと考えられる。

しかしながら、普遍論争について、Jung（1921/1971）は自身のタイプ論の立場から、「思考過程そのものに決定的な価値を置く抽象の立場と、（意識的であれ無意識的であれ）感性的対象による方向づけに従う思考や感情との対立」であると論じている。個人のタイプは「客体に対する構え」によって区別されるが、先の二つの立場は大まかに言えば、唯名論者は外向型に、実念論者は内向型に属すると見ることが出来るだろう。そして、Jung が強調するのは、「この種の対立が生じるのは、どちらかの側がまったく特殊な論理上の欠陥をもっているからでも、いっそうひどく目がくらんでいるからでもない […] それは根本的な心理的差異から生まれてくるのであって、この違いということがまず承認され確認されなければならない」ということである。

このような見解を踏まえると、唯名論と実念論のどちらが正しいのかという問い自体が心理学においては必ずしも正当なものでなくなってくる。そして、治療において強調すべきは主体か対象かという問いもまた否定され、むしろ「違いを承認する」という、主体と対象との双方の働きを認め、ともに深めていくことの重要性が示唆されてくる。

(3) 主体のコミットメント

命名行為それ自体は必ずしも唯名論の正当性を主張するものではない。だが、自我や主体の優位性を促しやすい命名において、対象に内包される無意識やイメージの豊かさを最大限に活かすということは出来るのだろうか。これを考えるに当たり、「見えないもの」に対して与えられた名前として〈異人〉について考察する竹中（2010）の事例は興味深い。言語の獲得段階にある子どもが、カーテンの向こうの「見えないもの」に対して「おおかみ」という名前を与える。そしてそこに銃口を向けるが、撃つ

ことなくピストルを片付けたというエピソードである。この関わりについて、竹中（2010）自身は、『私』の主体的なコミットメントによって〈異人〉は生成され、『見えないもの』を〈異人〉という名前に閉じ込めるような意味の創造があってはじめて私たちはその出来事の内側に入ることが可能になり、〈異人〉との出会いも可能になる」と論じている。すなわち、自我の優位性を強調したり、反対に主体性を放棄してイメージに無防備に身を預けたりするのではなく、対象の持つ力やイメージとどこまでも大事にしながら関わろうとする、この主体のコミットメントこそが、命名行為が治療的意義を持つときにおいて重要になってくるのではないだろうか。

ただし、ここで注意しなければならないのは、主体のコミットメントという点を強調するあまり、実際に達成しようと意識しすぎてしまうと、再び主体の意識が強くなり自我の優位性が働きやすくなってしまうことになるだろう。この意味で、治療的な命名行為を意識的に実現するのは難しく、むしろここで論じてきた内容は、治療的な命名には何が作用しているのかという観点を捉えるためのものだと言える。それゆえ、これを一つの技法としてクライアントに積極的に求めるのは難しく、どちらかと言えば、クライアントの言動にたえずコミットしていく治療者の意識を促すものと考えられよう。対象の持つ意味や内容が何であるかという点よりも、対象の持つ豊かさから出来るだけ触れようとする主体的な関与こそ、まず心理学的には重要だと言えるのである。

VI. 心理臨床学的観点で捉える命名機序

命名行為の基本的機序やその作用に関する検討を通じて、自我の強い関与によって唯名論的に対象を征服する可能性を心理療法が避けてきたこと、このおそれを脱却する方法として、主体と対象が切り離されず、かつ主体による対象への暴力とならずに、主体がコミットしていくことの意義が確認された。また、心理療法が行われる器を考えると、そこにはクライアントとセラピストという二人の人間が存在し、関係性という視座から命名機序を捉える必要性が明らかになってきた。このことから、心理療法における命名機序について、特にその構造を捉え直してみたい。

「主体が対象に名前を与える」という命名構造を軸に据えた状態では、どうしても主語の位置に当たる「主体」を軸にした論調になりやすい。しかし、主体による対象へのコミットメントを踏まえると、命名機序においても「名前を与える」ことの前提には、その名前がつけられる対象と主体との関わり的重要性が認められよう。言い換えれば、「主体が対象に名前を与える」のではなく、「主体と対象との関わりにおいて、名前がつくこと」を想定することで、名前を与えるためにではなく、あくまで主体と対象との関わりが命名行為の中心にあり、その産物として名前が生まれてくると捉えるのである。主体が対象にどこまでもコミットしていくとき、そこには能動的で恣意的につけられた名前だけではなく、対象の持つ豊かさの一部を垣間見させる名前を、主体は受動的に知っていくことも起こりうる。そのような名前は対象にまつわる種々の性質や物語を含んでおり、この物語の意味を伝えるものとして名前を知ること、

主体と対象との新たなつながりや広がりが生じる可能性が開かれていくだろう。また、特異な設定における二人の対話によって展開していく心理療法において、クライアントが対象に迫ろうとする過程に同行するセラピストは、クライアントの命名を隣で受け止める観察者となると同時に、命名行為自体への主体的な関与者ともなりうる。以上のことを踏まえれば、心理療法における命名機序とは、単なる「名づけるもの」という意味ではなくより心理学的な意味での主体として、「主体と対象との関わりの中で名前が生まれてくる、この過程にもう一人の主体がどのように関わるか」という視座によって検討が可能になるのではないだろうか。そこで生まれてくる名前の中には、すでにセラピスト自身の存在やその面接関係が織り込まれており、この言葉に含まれるものがまた二人の中でどのように展開されていくかを捉える視座が重要になってくると思われる²⁾。

ここで産物としての「名前が生まれてくる」ことを想定するとき、さらに一つの問いが現れる。すなわち、「名づけられる名前」と「見出される名前」には差異があるのだろうか。これまで論じてきたように、「名づけられる名前」とは創造的行為につながる一方で、ときに暴力的な支配を担いだものになる。また、「見出される名前」とは対象の種々の側面を捉えようとして発見される対象の一側面でありながら、豊富な性質を表すものとして存在する。とすると、このある意味でウロボロスの命題は、おそらくこの二つが相即的で循環的なものであることを意味しており、両方の性質を満たすものとして名前が存在するとき、そこで命名行為は真に創造的な営みとなって、命名者である私たちに対して働き掛けてくると考えられよう。

VII. 終わりに

本稿では、自我の優位性の忌避や主体によるコミットメントという点を織り込むことで、「主体と対象との関わりの中で名前が生まれてくる、この過程にもう一人の主体がどのように関わるか」という、心理療法における命名機序を捉える視座が見出された。このモデルは、従来の命名機序が一人心理学モデルで捉えられやすいことに対して、クライアントとセラピストとの関係性という二人心理学モデルで命名機序を捉える視座を提示したこととなり、より心理療法の実際に迫っていく一つの方法論を提示したものと考えられる。

また、心理療法における命名機序を捉えようとした本稿では、その対象に迫る主体となる筆者の視点もまた少しずつ変化していった。このことは、本稿の論点の一貫性に関する危うさにもつながるが、多面的な意味合いを持つクライアントの言葉や命名を一面的に見てしまうことに留意した必然的な結果だと言える。加えて、心理療法というクライアント（主体）が自身と深くつながるもの（対象）に対して関わっていく過程の中で、セラピスト（もう一人の主体）との対話や関係性の中で生まれる一つ一つの言葉（名前）を、それが持つ意味を考えながらどこまでも尊重し大切にしたいという臨床家としての考えのもとに、筆者はあえて言語化ではなく命名機序という観点を採用している。

しかし、命名行為は、主体がある視座に立った上で、そこから対象をどのように捉えるかという点において、一点透視法的な近代以降の絵画の描き方と共通する側面を持つ。竹中（2010）は、あくまで「内側に入る」ことの重要性を論じており、主体と対象との距離、すなわち対象を捉える主体の視点やその位置についても議論が求められよう³。また、Jung（1929/1969）は、心理療法における理論について、「どんな事例においても、理論を、一つの可能な説明仮説としてのみ扱うべきである」と述べている。本稿では、一口に主体や対象という言葉で論じてきたが、実際の臨床場面においては一人一人のクライアントがいて、心の苦しみや表現される内容はすべて他と異なる個別のものである。「真の名」あるいは「名づけえぬもの」との関わりを含めて、命名機序を捉えるモデルの臨床実践におけるリアリティとその限界を検討する必要性があるだろう⁴。これらの点を今後の研究の課題として挙げておく。

注

- 1) ただし、創世記と違って、日本書紀には世界創造の原初において、命名構造の主体の位置に相当するものは存在しない。この点に関して、創世記はキリスト教という一神教、日本書紀は自然や自然現象に畏怖を示す神道のように八百万の神を見出す多神教について書かれたものだとすると、宗教的違いに帰着させることも出来る。しかし、他方で私たちもまた、この世に生を受けたときに名前を付与された存在である。この観点は、命名によって誕生した対象が主体になり、主体もまた対象になるという位置づけの絶対性を否定するものにつながり、循環的で自己連関的に〈私〉が〈私〉を見つめていく作業にもつながるだろう。
- 2) なお、実際の臨床例については、拙稿（井芹，2012）でクライアントによる自己診断の告白について論じている。
- 3) 河合（1998）は、近代的な自我の意識に触れながら、「ただ一点から全体を統一して対象化して眺める一点透視法が自我の視点だとすると、これがない場合には必ずしも単なるカオスや崩壊に至るとは限らない […] むしろ様々なものはただ一点から見るのではなくて、それにふさわしいそれぞれの視点から見られることで、あるいはその視点で見ることで生きてくる」と指摘し、とりわけ夢への内在的アプローチ（河合，2010）において、対象をどこまでも内側から見ることでその内実を豊かにしていくことの重要性を論じている。
- 4) 注 1) と関連する内容として、主体性の発生がいかにして可能になるかという視座は、発達障害への心理療法的アプローチ（河合，2011）との接点を持ちうると考えられる。

引用文献

- Becker, H.S. (1963) : *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*. New York: The Free Press. 村上直之（訳）(2011) : 完訳アウトサイダーズ ラベリング理論再考. 現代人文社.
出口顯 (1995) : 名前のアルケオロジー. 紀伊国屋書店.
Ellenberger, H.F. (1970) : *The Discovery Of The Unconscious : The History and Evolution of*

- Dynamic Psychiatry*. New York: Basic Books. 木村敏・中井久夫（監訳）（1980）：無意識の発見（上） 力動精神医学発達史. 弘文堂.
- 福永光司（2011）：莊子 内篇. 講談社学術文庫.
- 東山紘久（1994）：箱庭療法の世界. 誠信書房.
- 市村弘正（1996）：増補「名づけ」の精神史. 平凡社.
- 井芹聖文（2012）：みずからの病の名を知ること、つけること 自己診断を手がかりに. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **58**, 261-273.
- Jung,C.G. (1921/1971) : *Psychological Types*. CW6. 林道義（訳）（1987）：タイプ論. みすず書房.
- Jung,C.G. (1929/1969) : *Problems of Modern Psychotherapy*. CW16. 高橋義孝・江野専次郎（訳）（1955）. 現代心理療法の諸問題. ユング著作集 2 現代人のたましい 所収. 日本教文社.
- 神田橋條治（1984）：精神科診断面接のコツ. 岩崎学術出版社.
- 河合隼雄（1969）：箱庭療法入門. 誠信書房.
- 河合隼雄（1991）：ファンタジーを読む. 楡出版.
- 河合俊雄（1998）：概念の心理療法 物語から弁証法へ. 日本評論社.
- 河合俊雄（2000）：心理臨床の基礎 2 心理臨床の理論. 岩波書店.
- 河合俊雄（2010）：夢への内在的アプローチとその限界. *こころの科学*, **154**, 2-9.
- 河合俊雄（2011）：はじめに 発達障害と心理療法. 河合俊雄（編）. 発達障害への心理療法的アプローチ. 創元社, pp.5-26.
- 丸山圭三郎（1983）：文化記号学の可能性. 日本放送出版協会.
- 中井久夫（1996）：風景構成法. 山中康裕（編）. 風景構成法その後の発展. 岩崎学術出版社, pp.3-26.
- 大月実（2007）：命名と名前 命名論の新たな地平. *認知言語学論考*, **7**, 117-167.
- 妙木浩之（2005）：精神分析における言葉の活用. 金剛出版.
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注（1994）：日本書紀（一）. 岩波書店.
- 関根正雄（訳）（1967）：旧約聖書 創世記. 岩波書店.
- 清水真砂子（1999）：訳者あとがき. 影との戦い ゲド戦記 I. 岩波書店, pp.301-305.
- 鈴木孝夫（1973）：ことばと文化. 岩波新書.
- 竹中菜苗（2010）：「見えないもの」への名付けとしての〈異人〉 柳田国男の『遠野物語』を手掛かりに. *ユング心理学研究*, **2**, 85-106.
- 山愛美（2003）. 言葉の深みへ 心理臨床の言葉についての一考察. 誠信書房.

（心理臨床学講座 博士後期課程 2 回生）

（受稿 2012 年 9 月 3 日、受理 2012 年 10 月 31 日）

Naming Mechanism in Clinical Psychology

ISERI Masafumi

This study examined the naming mechanism in clinical psychology. Through interpretation of treatment in shamanism and *Onmyoudou*, or “Genesis” and “the oldest of chronicles of Japan,” the following ideas in basic naming mechanism were elaborated; a) a structure that an subject names an object, b) a cutting function, which has either a productive and creative aspect or a violent and destructive aspect, c) characteristic property in time and space. These points were reconsidered from the viewpoint of clinical psychology, in which superiority of the ego is discussed. Moreover, it is important that the subject commits the object as much as possible. Considering the relationship between the client and a therapist, a method to examine the naming mechanism in clinical psychology is enabled as follows; when the name is born in the relationship with the main subject and the object, how does another subject commit and affect this process? In comparison with the conventional naming mechanism apt to be thought as one psychology models, this model provides a methodology to consider the naming mechanism in two psychology models.